

# 隨泉寺寺報

平成 24 年（2012 年）11 月号 第 507 号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

## 浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

### ■めいわくかけて ありがとう——たこ八郎さん——

たこ八郎というコメディアンを覚えておられるだろうか？。もとプロボクサー。パンチを受けた後遺症を残しコメディアンになった。たこさんのパンチドランカー症状は重く、コメディアンとして売れない時代は勿論、テレビに出て稼げるようになって、多くの友人に世話になっていたそうだ。そんなたこ八郎さんの口癖が「めいわくかけて、ありがとう」だったそうだ。

他人に迷惑をかけたなら「ごめんなさい」と謝罪をするのが当たり前。この言葉はたこさん一流の論理破綻だろうとお思いになるかもしれない。しかし、最近この言葉をテレビで聞いて、私たちの理屈よりこの言葉の方が正しいのではないかと直感した。

私たちは「迷惑をかける」ということを何か特 なことのように思っている。経済的に自立できない、健康を崩して一人で生活できない、慶弔などで人の手を借りる、等々だけが迷惑をかけるのではない。私たちは生まれ出たそのときから存在（いのち）を支えられ生きてきた。健康であろうが、経済的に独立していようが、波風ない家庭生活をおくっていようが、誰か（何か）の支えなくして一秒たりとも生きていられない。私の存在（いのち）そのものが迷惑をかけながらしか、ないのである。

たこ八郎さんの「迷惑かけて、有り難う」という言葉のなかに、生かされるいのちへの深い自覚を感じることができる。

### 11月の報恩講予定

- 11月 1日 ……本部役員会
- 11月 5日 ……桑原報恩講
- 11月6～7日 ……長者原東報恩講
- 11月8～10日 ……長者原西報恩講
- 11月12～14日 ……出口・宮原報恩講
- 11月15日 ……研修旅行 島根江津方
- 11月16～17日 ……荒野報恩講
- 11月19～22日 ……井原報恩講
- 12月 2日 ……本部役員会

### ☆【一期一会】

松本梶丸師がある本の中でこんな言葉を言われています。偶然の出会い、必然の れ。その中に人間は生きている。だからこそ、人は出会いを大切にしなければならないのではないだろうか。 れが必然だから、人はかろうじて優しくなれるのかもしれない。

「一期一会」という言葉があります。一生に一回の機会という意味ですよね。よく人と人との出会いを表す言葉として使われますが、出会いは偶然、 れは必然だからなんでしょう。人が避けられない苦しみの一つとして愛 離苦という言葉がありますが、死が必然である以上、れも必然です。

出会いの奇跡、出会いの大切さは、れが教えてくれるのかもしれませんが。

### 【死からの眼差し】

仏教を聞くとどうなるのか？、金が貯まるわけでも、社会的に出世するわけでも、健康になるわけでも、ましてや死ななくなるわけでもありません。

私の受け取りですが、「仏教を聞くと視座をいただける」のだと思います。それも、それまでの人生では思ってもみななかった視座を頂き、その視座を して“私、私の人生、私の生き方、私の生活、”をもう一度見直すことができるのです。

私たちは「自分だけは死にたくない」というところで生きていますから、死が怖いんですよね。生まれて、生きて、そして死んでいく。これが人間の自然な営みのなすなのに、どうしても死が受け入れられないわけです。根本をたずねたならば、都合の善いことは受け入れられるけれども都合の悪いことは受け入れられない私たちの自我を中心とした分 心に問題があります。 私たちがこの分 心という視座が“生きる、”ことを考えた時、やはり生の先にある死は受け入れられないのです。 仏教が説く「諸行無常（しょぎょうむじょう）」。全ては移り変わる、永遠に変わらないものなどないという教え。これは、例えば子どもが成長するという意味でもあるのですが、同じ意味で人間は必ず老い、そして死 という意味でもあるんです。言い方を換えれば、死すべき生を生きるのが貴方だと仏教は教えるわけです。

死すべき生を生きるという視座で、今一度自分の人生や生き方や生活を観たら、どうでしょうか？。本当に限りある命を生きる者として生きているのでしょうか？。人生、生活を大事にして生きていると言えるのでしょうか？。

生から死を見るのではない。死から生を観る。死からの眼差しを して生を観たとき、生の輝き、生の尊厳に目覚めることができるように思われてならないのです。

### ☆御礼

永代経懇志 金 拾萬円 佐々木秀男殿 故 佐々木和子様 特 永代経志として  
永代経懇志 金 拾萬円 満岡 幸枝殿 故 満岡 英明様 特 永代経志として

### ☆御礼

門信徒会へ 金 一封 佐々木秀男殿 故 佐々木和子様 香典返しとして  
門信徒会へ 金 一封 満岡 幸枝殿 故 満岡 英明様 香典返しとして

# 11月

## これからではない　すでに救いのみ手の中

あまり苦しまないように、あまり、まわりの者の迷惑になら　ような死に方、それはもちろん望むところです。が、そんな死に方を選びとる力のある私ではなかったのです。七転八倒、のたうちまわって死なねばなら　かもしれない私なのです。でも、のたうちまわって死んでも、「死にとうない」「死にとうない」と、わめきながら死んでも、まちがいなく、撰め取られる世界が、ちゃんと、既に成就（完成）されていたのです。

どこまで努めてみても「死にとうない」心の重みをどうすることもできないでいる「かくの如きの」「私」のためのご本願が、既に成就されていたのです。どんなに努めても、沈む以外ない私を、沈ませない船、それが、私のために用意されていたのです。

ここで、気がつかせてもらってみましたら、私の父は、「人間に生まれさせてもらった以上、ここまで来なかったら意味はないのだぞ」と、私を臨終の座に呼びよせてくれたのでなくて、いつの間にか、自分の力を頼む私に、「そんなもので、人生の

一大事をのりこえることはできるものではないぞ」と教え、「生きても死んでもみ手のまんなか」という世界に目覚めさせるために、私を呼び寄せ、身をもって私に、その廣大無碍の世界を、私に伝えようとしてくれたのだと、気づかせていただいたのです。

そして、思うのです。ひょっとすると、あの父は、如来さまが、私のためにお遣わ

しくくださった、如来さまのお使いであったのかもしれないと思うのです。そして、私にとって一番大切なことを、私に伝え、私を目覚めさせるために、「父」となって、この世に現れてくれたのではないかと、思われてくるのです。

さいわいに、今のところ、私に、癌転移の様子はないようです。しかし、私の妹が申します　り、私も妹も、既に「ひび割れた器」のような身の上です。いつ壊れても不思議でない体です。「終わりのとき」は目の前にあるのです。でも、妹も申します　り、「いつ壊れてもみ手のまんなか」です。終わってから「み手のまんなか」に捨てていただくのなら、「ひょっとして、捨てただけじゃなかったら・・・」という不安もあるのですが、現在ただ今、既に「み手のまんなか」なのですから、死にざまなどにかかわりなく、「いつ壊れてもみ手のまんなか」なのです。

☆ 学ばなければならないこと　　四衝亮（高山教区不達寺）

「あれでお葬式なの」。いつもお参りに伺うお宅で、憤慨して話されました。聞いて



てみると、親　のお葬式に伺ったら、家族とその方だけで火葬場で火葬して、それで葬儀は終わりだったというのです。

「その方は、近い身寄りの方が少なく、お一人での生活だったのですか」。「いいえ、家族も同居していたし、仕事だって昔からの家業を継いでいたのよ」。「それじゃ、お仕事の関係やご近所のお付き合いもあったでしょう」。「そうなのよ、だいぶ以前だけど災害に遭った時も、励まされたり助け合ったはずなのに」。

いろんな事情があるのだと思いますが、いずれにしても、私たちは一人や家族だけで生きているわけではありません。様々に人と関わって生きています。長年の付き合いの中では、迷惑をかけ、腹立たしい思いをさせたかもしれません。そして時には思わ　厚情をかけてもらったこともあったでしょう。

それら全てを無視するように、家族だけで葬儀をするのは、あまりに傲慢ではないでしょうか。確かに、人と人の関係は、こじれてもめることも多く、煩わしく、逃げ出したいこともいっぱいあります。それでその関係を、自分たちの都合で、利用することも断つことも自由にしたいという思いにかられます。　だから、死ねばもう関係ないと、他人の死を煩わしいと見たり、役に立ち利用できる間は関係するが、必要でなくなれば切り捨てるという傲慢さも生むのかもしれない。しかし、私たちが思いを馳せ、思い至らなければならないのは、切り捨てられる驚きと悲しみ、痛み、惨めさです。

葬儀、逃げ出せない関係を生き尽くすことをそのまま示してくださった身近な方の死。そこに、関係のただ中を生きている広さと深さと重さを学んでいきたいと思えます。

「葬」という象形文字を分解すると「くさかんむり」、「死体」、「卍」。

これは「草むらに死体をおさめる」という意味があるそうです。大事なことは下の「卍」で、多くの人が「死体」を運ぶ様を表す。つまり何人もの人がその行為に関わる様を表します。

「死」という字には、「骨に人が合掌する」という意味があります。その人が完全燃焼された生涯そのものを拝むという意味があるわけです。

「死」と「葬」を重ねて考えると、「葬式」とは「死者とご縁のあった人が、その故人の生涯を拝む」という意味があるわけです。

現在、古来から「葬式」「葬儀式」と呼んでいた儀式を「告　式」と呼んでみたり、「おれ会」と呼ぶことがあります。私はやはり「葬式」と呼ぶべきだと思います。日本人は、亡くなった方と　れを告げるだけの式典を執行してきたわけではないのです。亡くなった方とご縁のある人々が、故人の生涯を思い、その生涯に手を合わせるような儀式を執行してきたのです。

「どちらでもいいではないか」と言う人もあるでしょう。ただ、「葬式」を「告　式」と呼んでしまったことで置き去りにされたことがあるのではないかと思うわけです。